



Vol.41

ゆうことみゆきのふくふくトーク ソノコ de ソノコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソノコ(=お便り)形式で
語り合います。

イラスト/安田千夏

ニンニンケツポ(ホタル)



一番好きなカムイユカラ(神語)は？と訊かれたら、まずイチオシはこれ！あらすじを紹介しますね。

私は、私にピッタリのダンナさまを探しに真つ暗な大海原を飛んでいます。途中でヒラメ、サメ、タラ…いろんな若者に会ったけど、目が金色だったり顎にヒゲが生えていたり、みんなイマイチ。でも最後に出会ったのは巨大なシリカブ(メカジキ)。これこそ私に似合いのいい男。私はめでたく彼と夫婦になりましたーと、一匹のニンニンケツポ(ホタル)が語りましたとさ。

ホタルがお婿さんを探して海の上を飛び、おまけに運命の男性は先月号に登場したメカジキ！なんとも不思議なお話でしょ。



でも私はこのホタルが大好き。真つ暗な海を一人で行くのはどんなに心細いことか。しかも、どこかの光を指すんじゃないかと、自らが放つ光だけを頼りに飛び続ける。そんな時、誰かに出会ったら、多少気に食わなくてもペタンとくっついちゃうものだよ。なのに、彼女は決して妥協しないの。飛んで飛んで、とうとう自分の理想に辿り着く。この辺りが、単に「あれもイヤこれもイヤ」と言ってるだけの軟弱な女の子とは違う。

二風谷にぶたにいた頃、女子中学生ばかりのアイヌ語勉強会を開き、ニンニンケツポと名付けました。このホタルのように可愛くて強い女性になってほしかったの。その彼女たちもそれぞれの海原を飛び、今では立派な母親に…。なんだかしみじみしちゃいます。



ホタルのお話はお話を知っていたけど、優子さんのように深く掘り下げて考えたこと無かったな。メカジキはあの長〜い上顎など、目鼻立ちのくつきりとしたイケメンタイプなので、自らが光り輝くホタル神だけに美しいものが大好きな面食いなんだ、くらいにしか思ってたんだよね。うーん、物語を読む力の差ですね！面白い…。

ニンニンケツポ(ホタル)のお相手は？



ホタルはこのお話と同様でカップリングの相手は雌が選んだって。雄が黄緑色の淡い光を放ちながら飛び上がると、雌は草陰から目の付きやすい葉の上に移動して光のサインを送るんですって。そこに雄が近づいてきてゴールインとなるのですが、気に入らない相手にはお尻を下げてブロック！拒絶するんだって。選ばれない雄にとっては手厳しいものがあるよね。

ホタルのアイヌ語名はニンニンケツポ(消え消えする小さいもの)やニンニンケブカムイ(消え消えする神々ホタル神)と呼ばれるほか、十勝地方ではトムトムキリ(ピカピカ光る虫)と呼ぶところも。「消えるもの」、「光るもの」、同じホタルの名前なのに真逆の表現って、それぞれ視点の違いが感じられて面白いよね。

北海道で見るホタルの多くはヘイケボタル。小川や沼のほとり、湿原や田んぼの畦などで見ることができますよ。夏の夜、月明かりに照らされて幻想的に光るホタル。こどもの頃に歌ったよね。♪ほうほうほたるのこい あつちのみずはにがいぞ こつちのみずはあまいぞ…♪懐かしいな。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学副学長。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族博物館専務理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■安田千夏(やすだちか):神戸市生まれ。元アイヌ民族博物館学芸員。現在は同館でアイヌ若手育成事業の自然講座講師を務める。